



“子ども食堂”が必要とされる 現代社会を子どもの視点から描いた物語。



豊かに見える今の日本社会のひずみを受け、満足な食事をとることのできない子ども達がいることをご存知でしょうか。そんな子どもたちの拠り所となる“子ども食堂”が、地域の新たなコミュニティの場として全国各地に広がっています。なぜ今子ども食堂が必要とされているのか…。

そのテーマを子どもの視点から描き出したのは、『火垂るの墓』で戦禍のなか精一杯生きる兄妹と向き合った日向寺太郎監督と、2014年『百円の恋』（武正晴監督）で日本アカデミー賞最優

秀脚本賞を受賞した足立紳。2年に渡る脚本づくりを経て、傍観者に過ぎなかった少年が、車中生活をする少女と出会い、心の中に芽生えた葛藤や、親たちの戸惑いを目の当りにし、大人たちに一石を投じるべく、自ら行動を起こす子どもたちの健気な姿をとらえた作品が完成しました。

そしてダブル主演の藤本哉汰、鈴木梨央らの瑞々しい姿、食堂を営むユウトの両親を演じる吉岡秀隆と常盤貴子の温かい眼差しが心を打ちます。



小学5年生の高野ユウトは、食堂を営む両親と妹と健やかな日々を過ごしていた。一方、ユウトの幼馴染のタカシの家は、育児放棄の母子家庭で、ユウトの両親はそんなタカシを心配し、頻りに夕食を振舞っていた。

ある日、ユウトとタカシは河原で父親と車中生活をしている姉妹に出会った。ユウトは彼女たちに哀れみの気持ちを抱き、タカシは仲間意識と少しの優越感を抱いた。あまりに“かわいそう”な姉妹の姿を見かねたユウトは、怪訝な顔をする両親に2人にも食事を出してほしいとお願いをする。久しぶりの温かいご飯に妹のヒカルは素直に喜ぶが、姉のミチルはどことなく他人を拒絶しているように見えた。数日後、姉妹の父親が2人を置いて失踪し、ミチルたちは行き場をなくしてしまった。

これまで面倒なことを避けて事なかれ主義だったユウトは、姉妹と意外な行動に出始める――。©2018「こどもしょくどう」製作委員会

3.16(日)

牧石学区 2 会場で上映します！

子ども食堂について、認定NPO法人「全国こども食堂支援センター・おすびえ」は、昨年12月、子ども食堂を支援する全国各地の「地域ネットワーク団体」と実施し

た「こども食堂全国箇所数調査2024」の結果を発表。公立中学校数を上回る1万866カ所で、前年度から1734カ所増加。年間約1890万人が利用するまでに。上映会が、地元でも考えるきっかけになればと思います。